

Title	日本文化史概論(西村眞次著, 東京堂発行)
Sub Title	
Author	浅子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.169(341)- 171(343)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

事によると何らかの關係があるまいものでもない。支那の「石敢當」を沖繩のインガントウの起原であると主張すること、ちやうど同一程度の危さである。云々と述べてをられる。自分は日本と支那との石敢當の親縁關係は、ボルネオのパンガントーとの關係より數等密接だと考へる。西村教授は、二一頁に「肥後や薩摩には石敢當があつて、他國にはそのなかつた點から見ると、沖繩から我邦へ入つて來たもののやうにも思はれる」と云はれてをるが東北地方にも存在すること本誌餘白録に國分剛二氏の指摘せられた如くである。

その外今井濟二氏の「佐渡國分寺趾の研究」池上啓介氏の「東京府下玉川村堅穴住居趾群」、洞富雄氏の「信濃大町の借馬市」木村幹夫氏の「日本古墳の系統及び發達」(一)など有益な研究を滿載してゐる。洞氏の記文は、人文地理學上の好資料である。たゞその利用されてをる統計は村役場のものであるが、こゝにいふ數字はどれも實際に近いだらうか、役場の吏員の能力、科學的良心に現在の状態ではあまり信頼し難いのは遺憾である。是等の論文記事の多くは、西村教授に提出した學生のリポートだそうであるが、かゝる有望な學徒を多く門下に有する西村教授は幸福である。たゞし由來學生の書いたものにはまゝ出所のはつきりしないものが多くて困る。此號の「資料及報告」欄にかゝげた徐君報告の「朝鮮の土俗」の如きは、昭和二年東亞日報で元且の讀物として懸賞募集したものの、「朝鮮及朝鮮民族」(朝鮮思想通信社發行)の終りに轉載されてをる。(松本信廣)

日本文化史概論

(西村眞次著)
(東京堂發行)

國史全般に互る概論的敘述すらも、尙早の感なきを得ず考へられる今日に於て、日本文化史に於けるそれを課題とするといふことは、思ふに相當大なる學問的冒險であらう。この意味に於て西村眞次氏の『日本文化史概論』は先驅的使命を以て世に現はれたものといはなければならぬ。同氏は曩に『文化移動論』を公けにせられて文化の獨立起原説に反對するもの、様に思はれたが、本書に於ては徹頭徹尾これを貶黜し、「文化獨立起原説は一國の文化を其國で發生、生長、展開したと觀る考へ方でちよつと目には如何にも立派らしいけれど、實はけち臭い鳥國主義、慾張りの帝國主義の觀方であつて、其國家其民族其文化が世界に繋がつてゐることを見落してゐるものである。日本の國土は東半球の邊陲に位置してゐるけれど、そこは古代文化の湊合地點であり、日本の文化は島國內で異化したものだけれど、世界文化の粹を多く集めて居り、日本の民族は大方單式人種であると思はれてゐるけれども實は黒黃白の三大人種の混淆である。日本はかうして其出現以來世界的地位を占めて居り、決して全然孤立した國家ではなかつた。かう考へてこそ日本の世界史上に占める歴史的地位が高いものになつて來る」。といはれてゐる。このことは本書の全體系に對して重大なる關係を有するが故に長き引用を敢てしたのであるが、兎に角文化移動説は氏の信仰であるらしい。私は氏の文化史觀に於て再び長き引用を以て讀者を煩はさなければならぬ。かうした

新意義の歴史を私は文化史と呼ぶ。文化史は一言にして之を蔽へば、民衆の生活様式の進化過程である。生活様式は、社會、言語、工藝、土俗を含むところの文化的諸要素と、主として人種を指すところの體質的要素とから構成せられる共同習俗である。生活様式は圈を有つ。國には大小があり、大にしては人類、人種、國家小にしては村落、家族といふ風に、他と異つた共同習俗を現はしてゐる。こゝに、文化史の全分の區別が生ずる。人類總體の文化史を取扱ふものは世界史(Universal History)であり、或民族の文化史を取扱ふものが民族史(National History)である。人類と民族との關係は、全と分の關係に過ぎないが故に、世界史と民族史との關係も全分の差異に過ぎないものであり、どんな民族史も世界史から離れて其存在が許される筈がない。共同習俗はまた要素を有つ、それらの要素は幾様にも分けることが出来るが普通には社會、言語、工藝、土俗の四つとせられる。それらを全幅的に取扱ふ場合、それを私達は一般史(General History)と呼び、それらの各個を取扱ふ場合それを特殊史(Special History)と呼ぶ。これもまた全分の關係に過ぎない。故に日本文化史は日本民衆の生活様式の歴史であるといふことが出来る。即ち日本文化史は文化圈に於いては日本國家に限定せられて居り、文化質に於いては、日本民衆全體の共同習俗を取扱ふものであつて、それが世界文化史の一部であることはいふまでもない。氏の文法は相等に難解ではあるが、兎に角氏は飽く迄も日本文化史を世界文化史の一部として取扱はんことを努力しておられるその痕跡は十分に認められる。然し乍らこの態度は果して妥當であらうか。思ふに文化は互

に交流するものである。況や日本の如き島國といふ地理的環境に在つて、大陸諸國の先進文化の輸入に依り、絶えずその刺戟と感化を受けて發達した場合に於ては、外國との交渉を離れては文化の眞相を窺ふべくもないことは勿論であるが、之を東洋文化若しくは世界文化の一部として觀ることは夫々の立場からの觀方であつて、何等差支ないが、日本文化には日本文化としての立場が存する筈である。それが東洋文化又は西洋文化の一般觀に依て補足せらるべきは言を俟たないが、日本文化の觀方も亦、自らそれ自身存在の理由を有するのである。詳言すれば、日本文化を東洋的に若しくは世界的に一般的に理解するに對して日本文化そのもの、特殊性に於て理解しなければならぬ。この見地よりすれば日本文化は必ずしも日本に於ける支那文化或は印度文化若しくは西洋文化のすべての所産を考慮に入れる必要はなく、たゞそれが日本文化となつた範圍内に於て取扱へば十分である。即ち何等かの意味に於て日本的である限に於て——しかもこの場合、それが文化的勢力となつた限に於て——日本文化の領域に入り來るのである。

建國以來二千有餘年を経た我日本の文化を概觀するに當つては先づ大體の時期を劃して、これに何等かの内容的特色を與へなければならぬ。西村氏はその結論に於て、
「然るに私の試みた日本文化史概論は、古代に詳しく近代に粗である點に於いて、現代のファッションに遠いものであるといふ理由から、それを非難するものがあるかも知れない。論述の量の年代に對する分配の均化は望ましいことであるけれども、與へられた

分量には限りがあるので、私は已むを得ず『有レ始而後有レ終』といふ簡単な原理から、起原を重視する態度を採つて、日本文化起原を髣髴せしめることを旨としたのである。こいはれるがこれでは日本文化の闡明は得て望まれないのではあるまいか。

私は前に氏の文化史觀を長き引用を以て陳ねた。氏に依れば文化史とは民衆の生活様式の進化過程である。然るに生活様式には大小の圏があつて他と異つた共同習俗を現はしてゐるから、文化史にも全分の區別が生じ、人類總體の文化史を取扱ふものは世界史で或民族の文化史を取扱ふものが民族史であり、更に人類と民族との關係は、全と分の關係に過ぎないから世界史と民族史との關係も全分の差異に過ぎないとし、共同習俗の有する要素(社會、言語、工藝、土俗)を全幅的に取扱ふ場合を一般史と呼び、各個を取扱ふ場合を特殊史と呼ぶとせられる。然らば文化史の構成要素たる社會、言語、工藝、土俗の取扱如何(全體としてと個別的なものとしての)に依て一般史と特別史とを生ずることになり、更に前の生活様式の圏に大小があるから、文化史にも全分の區別が生じ、文化史の取扱ふ對象(人類全體と或民族)に依て世界史と民族史とが生ずるといふことも不可解である。要するに由て來るところは日本文化史を世界文化史の一部として解釋しやうとする氏の最初からの意圖よりしての誤謬更にいひ得べくんば文化移動説を遵奉する著者の信仰的態度に外ならない。

本書は文化史に對する明確なる概念及び取扱方法に於て遺憾があつた爲に、全體としての統一を失つたきらひがないではなかつた。即ち總論と各論とは如何なる關係に立つものであらうか。各

論の理解の爲め總論の存在の意義は奈邊に存するのであらうかが不明瞭の儘に残されねばならなくなつたのである。

著者はその叙文に於て、日本文化史概論などといふ著述は、學殖も深く、經驗も豊かで、十分自信ある學者がすべきものであつて云々といはれて恰も自信なきものゝ様に謙遜せられ、更に、しかし、此書は何も初めから専門家に見せるつもりで書いたものではなく、一般民衆、主として青年學生の一般修養書或は歴史の教科書参考書として提供したものであるから、詳細な遺漏のない史實の記述は素より期するところでなく、たゞ日本文化發展の過程を大體に知らさうとしたまでに過ぎない云々」と本書の價値に自ら疑を挿すかの様な口吻を漏されるが、これは著者の學者としての敬虔なる態度であつて、私は著者のこの先驅者な著述に對してその勞を謝する點に於て何人にも引を取るものではない。假令本書に於て幾多の缺點は見出されやうとも、斯る困難なる仕事に指を染められたといふことこそそのこと丈で、著者の先驅者としての地位は永久に失はれるものではない。著者の功は十分認められなければならぬ。

斯る著書を公にせられるのは先輩の後輩に對する心盡しであり又これをより完全なるものにするには後輩の先輩に對する唯一の禮儀であり、又義務でもあり責任でもあると信ずる。文化史の方面に興味をもたれる方には一讀をお奨めする。(菊判本文五一八頁圖版十葉定價三圓五十錢)

(淺子勝二郎)